

## 李光洙の日本語小説「加川校長」と「蠅」について

波 田 野 節 子

### 李光洙の日本語小説「加川校長」と「蠅」について

波 田 野 節 子

【要旨】一九四〇年七月の日本語小説『心相觸れてこそ』が中断したあと、李光洙は大量の対日協力的な論説、随筆、詩を日本語で発表したが、日本語小説は書かなかつた。その彼が、一九四三年一〇月、「加川校長」と「蠅」の二つの日本語小説を皮切りに一年間で通算七編の日本語小説を発表する。なぜ李光洙はこの時期に日本語小説を書きはじめたのか。

一九四三年春、李光洙は息子の中学進学のために平安南道の江西で暮らしはじめた。前年末には日本で大東亜文学者大会が開かれて李光洙も参加し、四月に朝鮮文人報国会が結成され、八月に第二回の大東亜文学者大会が開かれるという時期であつたにもかかわらず、李光洙は「私事」のために出舎に引き籠つたのである。ところが、まもなく結核が再発し、李光洙は京城にもどらざるを得なかつた。彼が病床にあるあいだに息子は京城の中学に転校し、江西中学の関係者を失望させた。病勢が回復したあと李光洙が日本語で「加川校長」を書いたのは、江西中学の日本人関係者に詫びるためだつたと思われる。このなかで李光洙は自らを、木村の転校の原因になる病弱な父親として登場させている。

李光洙が戻ってきた京城では学徒兵志願の強制が始まろうとしており、戦況悪化のなかで知識人虐殺名簿の噂が飛び交つていた。李光洙は同胞の犠牲を減らすために本格的な対日協力を決意し、ついに東京で学徒兵志願の勧誘を行なうにいたる。「蠅」において彼は、この決断を下すさいの無念の情を形象化した。年令制限のせいで

川校長」、そして『国民総力』に「蠅」を発表したのを皮切りに、表にあるように翌年一〇月まで一年のあいだに七編の日本語小説を発表したのである。なぜ李光洙は、日本語小説をこのとき書きはじめたのか。ここには李光洙の身辺の事情がかかわっていたと筆者は推測する。というのは、一九四三年一〇月に発表した二つの短編の舞台は、李光洙がその年の四月から六月にかけて滞在した平安南道の江西だと推定され、この滞在が日本語小説を書くきっかけになったと思われるからだ。

本稿の第一章では、李光洙の江西滞在と日本語小説「加川校長」との関係を周辺の事実やテキストを通して検討し、李光洙がこの小説を書くに至った事情を推論する。<sup>(3)</sup>第二章の(一)では「加川校長」と同時に書かれた「蠅」がその直後に始まる本格的な対日協力の宣言の意味を持つていたことを考察し、(二)で「蠅」のテキストを分析する。そして最後に(三)において、李光洙の作家経歴における蠅との特別な関係について述べたい。

## 第一章 「加川校長」

「加川校長」のあらすじは以下のとおりである。

主人公加川は長野県出身で、出世欲のない誠実な教育者である。都会のS中学の教頭という有利なポストを棄てて日町の近くの田舎に新設されたK公立中学の校長になり、家族と一緒に赴任してきた。五月一日に開校して以来四ヵ月、加川の奮闘にもかかわらず校舎の建築は進まず、教員もそろわない。そんなある日、優等生の木村が京城の中学の編入試験を受けるために成績証明書を請求してくる。一回生から高校入学生を出すための「ホープ」であった木村が学校を離れることに加川は気落ちするが、書類を送ってやるよう命じる。

後援会の総会が開かれる前日、策略家の李家が来校し、有力者の金川と朴澤を正副会長に就任させて建築費

を引きだそうという計画をもちかける。だが加川は、学校創立の功労者たちをやめさせることはできないと考え、神聖な教育事業に交換条件のついた金を受け取っては学校の精神が汚れると言って断る。李家の話に乗り気だった他の教官たちも、校長の決断をりっぱだと言って支持してくれた。

そのとき、木村の母親である道子が転校のための書類を取りに来る。加川が快く渡してやると、道子はその人柄に感激して泣きながら帰っていく。

林鍾国は『親日文学論』において「加川校長」のあらすじを詳しく紹介したあと、「無知な民衆に皇国精神と文化を植えつける」には加川は温厚すぎるし、その温厚さによって木村を感化することに成功したわけでもない。結局は「主題がはつきりしない」という評を下し、この作品をとくに批判していない。<sup>(4)</sup>

一方、金允植は『李光洙とその時代』で、「加川校長」は「春園が書けるかぎりの、親日文学の典型的な作品」だとする。なぜなら加川校長の目的は朝鮮人を「日本精神」で教育して皇国臣民を作ることだからだ。しかし李光洙の主張する「日本精神」とは、貧しくても正しく生きよという「破邪顕正」の精神であり、加川の教育理念は教師の人格の高潔さに基づいている。結局、金允植は次のように述べる。「こう見てくると、春園の文学上の親日行為はきわめて制限されたものだといえる。時局にたいする短い感想文や随筆、そして刺激的な詩歌において、彼は大言壮語し親日的な発言をくりかえしたが、もっとも力を注ぐべき小説における親日行為は、きわめて微弱で取るに足りないものだった」。<sup>(5)</sup>

林鍾国や金允植のこのような評価が示すように、善意の人物であり理想的な教育者が描かれているにすぎない「加川校長」に対日協力の要素を見出すことは難しい。<sup>(6)</sup> いったい李光洙は、何のためにこのような小説を日本語で書いたのか。はたして李光洙は、加川校長という高潔な教育者に自分自身を投影しているのだろうか。<sup>(7)</sup> また、

この小説の舞台である「K中学」や、近くの「H町」とは、どこを指しているのだろう。これらの問いに答えるためには、この小説が書かれるにいたった経緯を知らねばならない。

一九四三年四月一六日の『京城日報』の「文化だより」に「香山光郎氏（作家）平壤府水玉町東陽旅館に滞在中」という記事が載っている。この日付に注目する必要がある。なぜなら、翌日の四月七日午後には京城の府民館大講堂で、朝鮮文人報国会の結成式典が挙行されているからだ。四月八日付『毎日新報』の関連記事に李光洙の名前が見えないところを見ると、李光洙は式典に出席しなかったようである。

李光洙自身が一九三九年に立ち上げた朝鮮文人協会は、この朝鮮文人報国会の結成にともない、朝鮮俳句作家協会、朝鮮川柳協会、國民詩歌連盟とともに発展的に解消統合されることになっていった。日本では前年日本文学報国会が設立され、一月に東京で開催された第一回大東亜文学者大会には李光洙も朝鮮代表として参加している。そのときの紀行文「三京印象記」が『文學界』一月号、そして大会での発言「大東亜精神の樹立に就いて」が『大東亜』三月号に掲載されたばかりである。日本文学報国会の会長は李光洙が私淑する徳富蘇峰であり、文学者大会で議長をつとめた菊池寛との関係などから見ても、李光洙は朝鮮文人報国会の結成のために働くことが期待される立場にあった。参列者が一千名を越えるこの大型公式行事に「半島文壇の大御所」である李光洙が顔を見せていないことは、人々に奇異の感を与えたと想像される。

李光洙がこのような重要な式典に欠席して平壤の旅館に滞在していた理由は、息子の進学問題であった。李光洙と許英肅のあいだには息子が二人と娘が二人いたが、上の息子は敗血症で早逝し、息子は榮根一人だった。李榮根氏は、一九九三年に発表した随筆「이런 일 저런 일（あんなこと、こんなこと）」のなかの「講演」という文章で、このとき自分の身に起きたある事件について書いている。小学校六年生の終りに中学受験に失敗した氏は、担任から「背水の陣」を勧められて他校を併願していなかったために、中学校に進学できなくなってしま

った。氏は小学校もすでに一年遅れていた<sup>(14)</sup>ので、家族は非常に心配し、許英肅は夫の李光洙に何とかするようせがんだ。安昌浩の故郷である平安南道江西郡に新設される公立中学ならまだ入学に間に合うという話を聞きつけ、李光洙が現地に下見に行ったところ、他の地域の生徒に対しては狭き門であることがわかった。このとき李光洙は、息子の入学のために運動をしたらしい。連絡を受けた李榮根氏が父のいる旅館に着くと、父は人に会ったり講演してまわったりで、ひどく忙しそうだったという。氏は次のように回想する。

「父がたぐさんの人たちと会い忙しそうに動きまわっているのは何のためかよくわからなかったが、私の江西中学入学と関係があるのではないかと、幼い私は疑った。（中略）場所と時間をだれが決めているかは知らないが、とにかく父は私を置いてあちらこちらと動きまわった。たぶん戦争を手伝うことが我々の命を長らえる道だという話をしていただろう<sup>(15)</sup>」。

この文章からは、父が自分のために対日協力をしたのではないかという、氏の疑いと心配が伝わってくる。中学に入学して父子二人の生活が始まると、李光洙はもう講演をしなかったという。李榮根氏の随筆「講演」はここで終わっている。

李光洙は息子を江西中学すなわち「K中学」に入学させるために平壤すなわち「H町」に滞在し、そこでの講演活動に忙殺されて朝鮮文人報国会の結成式に出席できなかったわけである。こうして息子は江西中学に入学した。「加川校長」のなかでは、五月一日に新設のK中学の「開校式並に入学式が挙行」されるが、江西中学の入学式も同じ日だったらしい。その三日後の五月四日、『京城日報』の「文化だより」に「香山光郎氏、令息江西中学入学につき、当分平安南道江西郡江西邑に寓」<sup>(16)</sup>。通信宛名は同邑毎日新報支局気付」という記事が見える。それから一ヶ月半たった六月一六日の『京城日報』に、「江西にて」というタイトルで李光洙の短歌が載っている。「子供と二人で、十畳敷き位の二室を借りて、僧的な生活をしてゐます」という前書きが付けられ、江西での「近

状」を歌った五首である。

三日月の皐月の宵を畦づたひ 蛙の聲に導かれ行く  
苗代の水汲む農夫の聲上る 鷺立つ野邊の夕陽の赤さよ  
晝なれば野邊の雲雀を夕されば 夜なく鳥を裏山に聴く  
なだらかに流るゝ丘を越えて行く 風に追はるゝ麥の青波  
わが君に聴かせまほしや「一字不明」どもり あかつく森の山鳥の聲

これらを読むと、のどかな春の田園風景が目につかぶようであるが、実際にはなかなか大変な生活だったらしい。李栄根氏は江西での暮らしぶりをこう回想している。

「私は江西中学に通い、父は本を読んだ。戦争は激しくなり、食糧事情が悪化して農民は松の皮を食べはじめた。私たちも一日に一回は松の甘皮とアマドコロ(응골레)を混ぜたものを食べた」<sup>(16)</sup>

こんな生活は、病弱な李光洙には無理だったのだろう。この短歌が紙上に載る一〇日前の六月六日の「文化日より」は、「香山光郎氏、宿痾のため平南江西郡邑内徳興里四七九金村方にて療養中」と伝えている。持病の肺結核が悪化したのである。

李光洙は「加川校長」のなかで自らを病弱な木村の父親として登場させている。木村の転校は設備のよい京城の学校に移るためでしょうかと尋ねる妻に、加川校長はこう答える。

「うんにゃ。おれはさうは思はぬ。木村に限つてさうではないと思ふ。きつと、あの子のお父さんが病氣なんだ。それでKへ來られないんだ。あの子のお父さんといふのが、稀に見る真剣な人でね、ことに子供の教育には真剣なんだよ。自分で、間借りをして、自炊をしながら、子どもの世話をしたくらだからね、六十男がさ。」

「あ、さうですか。自炊してゐたんですか。」

浪子は感心の點頭をした。

「うむ、自炊してゐたんだ。それは無理だった。木村さん、Kに來てから、めつきり老けちゃって、あまり急に痩せてゐた。こないだの草刈の時にも、木村さん來ていたがね。子供たちに雑つて草を刈つて、それを運んでみたが、息が切れて、痛々しかった。それでも三十貫もある草の束を、肩に載せてあの坂を登つて來るのを見て、おれはほろりとしたよ。しかし、やつれてゐるな、と思った。咳をしてゐた。それで來られないんじゃないかと思ふ。その證據には、木村から手紙がないんだ。ペウキオクレルという電報が來たきりでね」<sup>(17)</sup>

父とともに京城に行った木村は、父の病氣の悪化のため江西にもどれなくなり、結局、京城で転校試験を受ける。合格した息子の「転校依頼」を受け取るために江西中学にやつてきたのは、木村の母の道子だった。加川に尋ねられるまま、彼女は家庭内の様子を次のように語る。

「はい、木村は京城に帰ると、どんどん衰弱が加はりまして、今入院しています。」

(略)

「それでも、木村は、學校に申譯がないから、無理をしても來る、子供の教育も戦争だから、子供の教育のために、死んでもよい、と申して居ります。ことに校長先生に申譯ない、どうしても子供を校長先生にお預

李光洙の日本語小説「加川校長」と「蠅」について(波田野節子)

けしななければならないと、申して居りまして——」

(略)

「太郎は太郎で、Kへ行く、Kへ行くと泣いて居りますし、それをわたしが心を鬼に致しまして、無理矢理にT中學に編入試験を受けさせました。校長先生、誠に申譯(18)ごさいません。」

道子の話は、このとき李光洙の家庭に起きた出来事を推測させる。李光洙は息子をひきつづき江西中學で学ばせたいと希望したが、病気が悪化してどうすることもできなかった。息子を手もとに置きたい許英肅は無理やり息子に転校試験を受けさせ、合格すると自分が江西中學に行つて転校手続きの書類を受け取つてきたのだから。結果として李光洙は、息子を中學に入れるために協力をしてくれた人たちの期待を裏切ることになつてしまつた。それを気にした李光洙は、病が癒えたあと、彼らに事情を説明し、感謝と申し訳なさを伝えるために「加川校長」を日本語で書いたのだと思われる。「破邪顯正」を唱える加川校長の正義感にあふれる姿と、校長の行動を支持する教員たちの爽やかな姿は、自分の息子を快く送り出してくれた江西中學の関係者たちへのオマージュであり、加川校長の敵意を予想しながらK中學にやつてきた道子が加川の態度に胸を打たれ、「可愛い子供を自分の傍に置きたいと思つたことが「略」恥かしくもあり、悲しくもあり、とうとう校門の外で泣き崩れる姿は、妻の非礼を詫げる李光洙の心情を代弁したものだと思われるのだ。(20)

## 第二章 「蠅」

(一) 対日協力宣言としての「蠅」

「蠅」は、国民総力朝鮮聯盟の機関誌『国民総力』の一九四三年一月一日号に掲載された。この団体は、一九三八年に総督府が銃後を支える国民総力運動のために創設した国民精神総動員朝鮮聯盟の後身である。下部組織として、七戸から二〇戸を単位とする「愛国班」が朝鮮全域で組織され、神社参拝の強要、供出、勤労報国隊への動員や政策伝達に重要な役割を果たした。(21)「蠅」は、その愛国班の勤労奉仕に出られない老人が、少しでもお役にたちたい一心で班の家々をまわつて蠅取りをする話である。

「蠅」が掲載された『国民総力』は「加川校長」が載つた『国民文学』と同じ一月一日の発行であるから、この二編ともに八月の終りから九月ころ執筆されたと考えられる。夏が終わわり、ようやく体力を回復して筆を取つた李光洙は、江西で世話になつた日本人たちに詫げる心をもつて「加川校長」を書き、京城と日本にいる日本人関係者に向けて、これまでの怠慢の詫びと同時にこれからの覚悟を表明する「蠅」を書いたのだらう。「蠅」は、主人公の次のような慨嘆から始まる。

私ほど臍甲斐ない男は稀であらう。大戦争のこの時節に、何一つお役に立つことも出来ない。(24)

五〇歳を越えているため愛国班の勤労奉仕に出ることを断られた主人公の無念の言葉である。ここには李光洙の胸中にあるさまざまな無念が込められていたと想像される。先に見たように、息子の入学問題のために春から京城を離れて四月の朝鮮文人報国会の結成式に欠席した李光洙は、六月には体調を崩し、まもなく京城に戻つた。八月に東京で開催された第二回大亜文学者大会にも参加できなかった。前年一月に東京で世話になつた日本文学報国会の作家たちに対して、李光洙はさぞかし面目がなかつたことだらう。そもそも「民族改造論」で「私」よりも「公」を優先せよと主張した自分が、家庭の問題で重要な時期に京城を離れたことに李光洙は内心忸怩たるものがあつたはずである。そのうえ、これほどまで無理をして江西中學に入れた息子は京城の中學に転校し、

現地の人たちの期待を裏切る結果になってしまった。

こうした無念に加え、李光洙の小説に「つねに内在する相反感情から推して、彼の胸の底にはまったく反対の無念があったと想像される。息子の進学問題というやむを得ない事情は、彼を京城から引き離してくれた。李光洙は『わが告白』のなかで、当局の目から逃れられなかった理由の一つは教育や産業などに従事していない自分には「避難所」がなかったからだと言っている。<sup>(26)</sup>その彼が今や堂々と江西に引きこもっていられるようになったのだ。ひそかな安堵がなかったと言えは嘘になるであろう。ところが結核という「宿痼」は彼からこの避難所を奪った。李光洙はふたたび京城に戻ってきてしまう。春から自分がしてきたことがあらゆる面で水泡に帰したことに、李光洙は無念と虚脱を感じたに違いない。「私ほど腑甲斐ない男は稀であらう」という言葉には、こうした幾重もの嘆きが込められている。

京城に戻った李光洙は、そのまま病気を理由に閉じこもることもできたはずである。ところが逆に、彼は対日協力へと踏み出していく。このとき、彼の念頭には「三万何千名」の知識人虐殺名簿があり、<sup>(27)</sup>有名人物を対日協力の先頭に立たせることを成果とみなす当局の圧力があつた。<sup>(28)</sup>『わが告白』の「民族保存」の章にある次のくだりは、この時期に該当すると見られる。

私個人の状況からいえば、病氣と称して寝こんでいればそれまでだった。私は同友会事件を一度終えていたから、このさき何もしなければ日本官憲に捕まる理由はなかった。だが、もし対日協力者と指弾されることを覚悟して行動すれば、私の将来には恥辱しかないと、私はよく知っていた。崔麟、崔南善、尹致昊の前例があるではないか。自分の身を売って父を苦難から救おうとした沈清の心境しかなかった。ほかの親日派はどうか知らないが、私のしようとしている親日派はカネや権勢や名誉をもたらすものではなかった。ある日、妻

にこの心境を語ると、妻は気でも違ったのかと言って泣いてとめた。私も号泣した。だが私は、民族のために生きるると自任してきた私としてはこれが最後になすべきことだと考え、妻にそう話した。<sup>(29)</sup>

同胞の犠牲を少しでも少なくするために日本に協力するという、まるで李光洙小説の登場人物が持ちだしそうな論理である。もちろん、これが当時の彼の心理を忠実に反映しているかどうかはわからないし、後づけの理屈が混じっている可能性もある。だが「虐殺名簿」の噂が飛びかう戦争末期の植民地において、冷静な判断力を保つことが難しかったことは想像に難くない。なによりも「蠅」に表われた鬱屈した無念の情には、李光洙の主観的な真摯さがにじんでいる。

この直後、李光洙は『新太陽』（旧名『モダン日本』）十一月号の「徴兵制施行記念 戦ふ朝鮮特輯号」に前年閣議決定された朝鮮の徴兵制実施を讃える短編「兵になれる」を発表する。この号の発行日は一〇月二一日。日本人学生の学徒出陣に合わせて、朝鮮人学生の兵役志願の強制的な受付が始まるうとしているときである。<sup>(30)</sup>日本の書店に『新太陽』のこの号が並んでいるころ、李光洙は「日本留学生勧誘団」の一員として日本に行き、学生たちに志願を勧めた。<sup>(31)</sup>総督府の依頼を断れないこともあったのだろうが、彼が病を押して引き受け、東京で高熱を出しながら学生を説得したのは、「志願・逃亡・監獄」という三つの選択肢しかないこの状況では、むしろ進んで志願する方が学生たちの利益になると考えたからだった。講演会で李光洙は学生たちに対し、君たちが志願すれば民族差別をなくすことができると訴えたという。<sup>(32)</sup>

翌一二月には、その前月に東京で開催された大東亜会議を背景にして大東亜共栄圏構想を日本女性と中国男性の恋愛に形象化した短編「大東亜」を『緑旗』に発表する。これは、第二回大東亜会文学者大会で津田剛が打ち上げた、「聖戦」勃発の二二月八日を期して各作家が一齊に大東亜にふさわしい作品を書き、各雑誌はこれを掲

載して一大文学運動を展開しようという提案に承えて書いたものと思われる。津田は、文学者大会でこの提案をして菊池寛議長をはじめ満場の賛成を得たと『国民総力』で誇らしげに書いてあるが、『緑旗』すら一二月号に特集号を組めなかったところを見ると、津田の誇大妄想的な提案にまじめに応じた作家は李光洙だけだったよううだ。<sup>(35)</sup> 李光洙が「大東亜」を書いたことには、第二回文学者大会に欠席したことへのお詫びの意味があったらう。<sup>(36)</sup>

一九四三年、「宿痾」のために江西という避難所から京城に戻ってきた李光洙は、無念の情を抑えつつ、これまでの不義理を周囲に詫びるとともに同胞の役に立とうという心情をもって「蠅」を書いた。こうしてみると、蠅の群れに向かっていく「蠅」の主人公のまるで破れかぶれのような行動は、李光洙がこれから始めようとしている本格的な対日協力の宣言であったとも受け取られる。

## (2) 「蠅」の分析

それではテキストを詳しく見てみよう。「蠅」のあらすじは次のつぎの通りである。

ある朝、愛国班の班長が、家から一人街道の修繕工事の勤勞奉仕に出るよう触れまわる。「私」は勇んで出かけていくが、班長から五〇歳以上は駄目だと断られ、若者たちからも邪魔にされる。なんとかお役に立ちたいと思った「私」は、班内の家の蠅を取ることを申し出て、各家の奥座敷や台所に入る許可を取りつける。

蠅の習性と個性を熟知している「私」はつぎつぎに班内の家をまわって蠅を殺していく。午後四時過ぎまで一〇軒一三世帯をまわり「遺棄死体総計七千八百九十五匹の蠅の叩き殺し」を完了した「私」は、身も心もくたくたになる。学校から帰った子供にこの話をすると、口に入れた飯を吹き出して笑いこけた。その日、愛国

班の人々は生まれて初めて蠅のいない夏の夕餉を快適に食べたが、「私」は三日ほど寝込んでしまった。<sup>(37)</sup>

中学生の息子と二人暮らしの五〇歳を越えた男性で「白髪」と「骨と皮とばかりの貧弱な體格」<sup>(38)</sup>という描写から、「私」が江西で暮らしはじめた李光洙自身であることは明らかである。勤勞奉仕の年令制限のことを知らなかったのは、来てまだ日が浅いためだろう。半ズボンに半袖、運動靴、子どものカンカン帽という百姓ぼなれした服装は、「私」が町から来た人間であることを示す。また集合場所に来た「私」が、馬子の龍三の「先生は、どこへいらっしやるんですか」<sup>(39)</sup>という言葉から「皮肉な笑い」を感じたのは、この共同体にまだ受け入れられていないことへの不安を表わしている。

「私」は「お役に立つ」ことに強い執着を見せる。年令のために班長から断られても、「何でもやります。土を掘るのも、運ぶのも。決して君たちに迷惑はかけぬ」<sup>(40)</sup>と言って食い下がり、若い者の邪魔になると言われてあきらめたあとは、代わりに班内の蠅を取ることを申し出る。どうして「私」はこれほどまでに「お役に立ちたい」のか。そもそも「私」は何の「お役に立ち」たいのだろうか。

「お役に立つ」という語の前に来るのは、時局柄、「天皇陛下」とか「御国」という言葉である。そして「天皇陛下のお役に立つ」ことの最高かつ最終的な到達点は、兵士として戦場で死ぬことだ。もちろん勤勞奉仕で道路を直すことも、勤勞奉仕に出た人々のために蠅取りをすることも、間接的、究極的には戦争のためであり、「天皇陛下のお役に立つ」ことである。だからこそ勤勞奉仕に出られない老人が、奉仕をしてきた若者たちのために快適な夕食環境を提供するという小説「蠅」は愛国美談であり、『国民総力』という雑誌にふさわしい作品なのである。

だが「蠅」のなかで、蠅取りという行為を通して、天皇のために死ぬことの崇高さが描かれているかというと、



彼らは糞便の中から出て来て、身体も足も洗うことなく、われわれの食物の上に乗る。そして、われわれが箸を取る前に、無遠慮にも食べる。不潔と疾菌とを対価として、後に残して立ち去る(中略)。彼らの伝播した病原菌のために、幾百億万のわれわれの祖先や同胞が病で倒れたことだろう。彼等を生かし置きたらんには、われわれの子孫にも同様の災を及ぼすことであろう。<sup>(47)</sup>

この信念をもって「私」は叫ぶ。

「そうだ。殺すことだ。撲滅することだ。日本中から蠅の種を絶やせ。世界中の蠅を撲滅せよ。彼等をして、よき生命に生まれ代らしめよ」<sup>(48)</sup>

半ズボンに半袖、運動靴を履いて子供用のカンカン帽をかぶった骨と皮の老人が、蠅叩きを手に「遺棄死体総計七千八百九十五匹の蠅の叩き殺し」<sup>(49)</sup>を完了する姿には、滑稽を通りこして鬼気迫るものがある。当時の読者の脳裏には、つい五年前に岡山県で起きた、結核を病む青年が一夜で三〇人の村人を惨殺した事件が浮かんだことだろう。<sup>(50)</sup> 犯人は学生服に軍用ゲートルを巻いて地下足袋を履き、鉢巻に二本の懐中電灯をさしていたという。「私」の蠅殺しは、明らかにこの大量殺人事件のパロディである。

「よき生命に生まれ代わらしめよ」という叫びには、仏教の輪廻思想が意識されている。一九三九年に書いた「鬻庄記」のなかの、お膳にたかってくる蠅を蠅叩きで叩き殺す場面で、李光洙は「蚊や蠅は殺さないわけには行かないのです。自分の國を侵略するものに對しては戦はざるを得ないのです」<sup>(51)</sup>と書いている。蠅殺しと戦場とは彼の内部で結びつき、殺さねば生きていけない生存競争の世界に生きる者として彼は、「もつとも愛するもの

のために、因縁の遠いものを犠牲にしなくてはならぬ廻合せ」<sup>(52)</sup>を「宿命」として受け入れていた。そうした仏教的諦念も、この叫びには含まれている。このほかに、ずっと以前から西洋への反感を持ちつづけてきた彼は、<sup>(53)</sup>「世界中の蠅を撲滅せよ」という叫びが太平洋戦時中のこのとき「世界中の白哲人を撲滅せよ」という読まれ方をされることも計算済みだったはずである。この叫びには、こうしたもろの意味が込められている。

一日中蠅叩きをした「私」は、疲労で三日間寝こんでしまった。蠅はそのあいだも増えつづけ、すぐに前と同じく村人を悩ます存在になったことだろう。蠅を相手にする戦争の空しさは「私」の行動をますます滑稽なものにしているが、にもかかわらず、この短編が喚起するイメージは読む者の感覚に〈亀裂〉を生じさせるインパクトを持っている。金慶美は、「蠅」は、老人も銃後奉公せよと呼びかけた作品であるにもかかわらず、宗主国の論理の過剰な実践がむしろ滑稽感を生じさせ、作家の意図とはうらはらに模倣の両価性を作りだして、宗主国の支配言説に〈亀裂〉を生じさせると、ホミバーバの理論を適用して述べ、<sup>(54)</sup>李承信は、「蠅」は銃後の奉公を呼びかけながらも、その過剰によって奉公それ自体の無意味性と風刺的な笑いを引き起こし、日本の植民支配言説に〈亀裂〉を入れていると指摘したうえで、この作品は「親日文学」というこれまでの読解の仕方それ自体に〈亀裂〉を生じさせるものと評している。<sup>(55)</sup> こうした評価は「蠅」という作品のもつ強力なインパクトが生み出したものである。

だが「蠅」は表面的にはあくまでも、年令制限のため勤勞奉仕に出られない老人が一日の仕事を終えた若者たちがゆつくりと食事できるよう蠅退治をするという愛国美談であり、同時に、病原菌を媒介する不潔な蠅を撲滅しようと呼びかける衛生小説である。一歩まちがえば戦争の愚弄につながりかねない滑稽感と不潔さを内包する李光洙の短編「蠅」は、銃後の奉公を勧める小説として国民総力朝鮮連盟の機関誌『国民総力』に堂々と掲載された。つねに両価性をもった小説を書きつづけてきた李光洙はこの愛国小説のなかに、本格的に對日協力に踏

み出すことへの決意と無念の情を同時に込めたのである。

### (3) 蠅と李光洙

最後に、蠅と李光洙との長い因縁について述べる。「蠅」の主人公「私」が蠅を殺さねばならぬ理由は、人間を害する病原菌を蠅が伝播させるからだった。「民族改造論」で改造目標の一つとして「衛生」を掲げただけあって李光洙は若いときから蠅の撲滅に熱心だった。結核菌という病原菌に苦しむようになってからは、この傾向に拍車がかかったようである。

李光洙が生まれた当時の朝鮮は衛生状態が非常に悪く、故郷の平安道では周期的にコレラが流行して多くの人々が犠牲になっていた。彼の両親が亡くなったのは一九〇二年の流行時である。このとき、〇歳だった李光洙は二人の妹とともに孤児になり悲惨な目に遭った。だが李光洙が衛生を意識したのは、東京の生活を経験して故国の衛生観念の低さに気づいてからのことだったと思われる。<sup>(57)</sup>卒業後、故郷の五山学校の教師として赴任する汽車のなかで、李光洙は同胞の不潔さに辟易しながら、彼ら全員を「清潔にきちんとなるよう教えるのが僕の責任」だと考えている。<sup>(58)</sup>五山では校主の李昇薫の村の洞会長として家々をまわって衛生検査をした。「龍洞」<sup>(59)</sup>、「農村啓発」<sup>(60)</sup>、「亭(土)」<sup>(61)</sup>からこの「蠅」に至るまで、五山時代の経験は作品のなかでしっかりと生かされる。李光洙が蠅を文学的な存在に昇華させたのもこの五山時代である。そして、そのきっかけは日本のある小説だったと筆者は推測している。

明治学院普通学部を卒業する直前、李光洙は『富の日本』という雑誌の懸賞作文に応募して当選した。自分の写真と作文が載った『富の日本』一九一〇年三月号を、彼は五山で大切に保管していたことだろう。<sup>(62)</sup>この号には、泉鏡花の「苧環」<sup>(63)</sup>という短編が載っている。これはもともと「蠅を憎む記」というタイトルで一九〇一年六月の

『文芸界』に発表されたもので、主人公は金坊という幼い少年である。

姉が表の店に出ていったあと、金坊は座敷で姉の針箱の糸巻を出して遊んでいるうちに睡魔に襲われる。すると、たくさんの蠅が現われて大暴れを始める。座敷は美しい姉の庇護のもとにある聖地であり、それを襲う汚れた蠅は世間とつながる店からやってくる。店に来る客のなかには不潔な田舎者や、酒反吐を吐く紳士がおり、それが蠅となって仏壇の「観音様」も歯が立たないほどの傍若無人を繰り広げるのだが、姉がもどってきて団扇で煽ぐと、たちまち蠅は退散する。鏡花独特の筆致で描かれた美しく幻想的な小編である。<sup>(64)</sup>

東京とは比較にならない衛生状態のなかで毎日のように蠅と闘いながら、李光洙は、この小説を繰りかえし読んでいない。のちに『東亜日報』に連載した『千眼記』(一九二六年)や、『三千里』に発表した「壽岩の日記」(一九三二年)のちよつとした描写にその痕跡が残っている。たとえば『千眼記』では言葉を解する不思議な蠅が登場する。以下は、出会いの場面での蠅の擬人的な描写である。

そいつはさほど大きくはないが、色が浅黒くて首が短く尻尾はひどく尖り、がっしりとして敏捷そうである。<sup>(65)</sup>

このくだりは、「苧環」で金坊の前に現われる蠅のつらがまえの描写を思い起こさせる。

一ツはくろがねよりも固さうな、そして先の尖った奇なる烏帽子を頭に頂き、一ツは灰色の紋ついた素袍を着て、いづれも虫の顔でない。<sup>(66)</sup>

また「壽岩の日記」の主人公の幼い少年が海で溺れて意識を失っていく様子は、次のように表現される。

僕の頭はどんと水中に沈んでいった。「母さん！」と呼ぼうとしたけれど、声は出ず、耳にはウィーンという音がし、目の前には赤いの、青いの、黄色いの、長いの、丸いのが見えた。<sup>(66)</sup>

これは金坊が眠りに落ちていくときに見るシーンに喚起させる。

宛然糸を環にしたやうな、萌黄の丸いのが、ちら／＼一つ見え出したが、見る／＼紅が交つて、廻ると紫なつて、颯と碎け、三ツになつたと見る内、八ツになり、六ツになり、散々にちらめいて、忽ち算無く、其の紅となく、紫となく、緑となく、あらゆる色が入乱れて、上になり、下になり、行へ飛ぶかと思ふと左へ躍つて、前後に飜つて、瞬をする間も止まぬ。<sup>(67)</sup>

このようなイメージの相似は、李光洙の意識の底に「芋環」の文章が刻まれていたことに由来すると思われる。「芋環」を耽読することで李光洙は、便所や台所の蠅と闘いながら、蠅を嫌悪するだけでなく、その習性に精通し作品化することを学んだ。一九一七年の『無情』には、蠅が効果的なアイテムとして登場する。二つ、例を挙げておく。二日目、英采の身代金千円の心配をしながら英語の授業をしに金長老の家に行った亨植は、十字架に掛けられたイエスとその衣を奪いあう兵士の絵を見ながら、人生は演劇で、人間は何かの力に縛られて日々悲喜劇を繰り返している存在だと考える。しかし、たとえ人生が演劇であっても英采は助けなければならぬ。そんな切迫した思いでいた亨植がふと天井を見上げると蠅がいる。

天井には蠅が四、五匹、自分たちも人生で何かを演じるがごとく、追い駆けたり、逃げたり、留まったり、前足を擦ったりしている。(二八節)<sup>(68)</sup>

のんきそうな蠅の描写が場面転換の役割を果たし、英采を心配していた亨植がこのあと善馨と順愛に授業をしながら唐突に美的な快感をいだいても読者に違和感を持たせない。翌日、妓生房を訪れた亨植は、英采が自分宛ての手紙を残して平壤に発つたと知らされる。その手紙を取りにいった遣り手婆を待つあいだ、亨植のじりじりとした気持ちを暗示するのは次のような描写である。

長持の足もとに置かれたガラス製の蠅取り瓶に四、五匹の蠅が入っていて、ガラス壁をよじ登ろうとしては落ち、またよじ登ろうとしては落ちては落ちている。(四九節)<sup>(69)</sup>

言葉解する蠅が登場する『千眼記』が『東亜日報』に連載された一九二六年、修養同友会の機関誌『東光』が創刊された。その第二号の健康欄に、蠅の撲滅を訴える「사람잡아먹는파리(人を殺す蠅)」という文章が載っている。いたいけな少女を大きな蠅が毛むくじやらの脚で抱きかかえている挿絵【図】に「蠅を殺して子供を救おう」という刺激的な見出しが付き、無記名であるが、蠅撲滅への執念にあふれたその文章は李光洙を彷彿とさせる。またテキストにも短編「蠅」との共通点が見られる。

「蠅」では、蠅退治をしている家で煎餅と瓜を出された「私」が、「蠅のゐる家の食物は食べませぬ」と言つて手を出さないくだりが唐突な印象を与える。これは健康欄にある四つの「하지마오(してはいけない)」項目のうち「蠅のいるところで物を食べない」という規則に従ったものだと考えられる。<sup>(70)</sup> こうした相似もさることな



がら、健康欄の文末の次のような呼びかけは、「殺すことだ。撲滅することだ」と叫ぶ「蠅」の主人公の蠅撲滅への狂的な信念を彷彿とさせる。

蠅 蠅  
蠅 人を殺す 蠅  
蠅 蠅

□蠅は我々の仇敵  
蠅は病菌とすべての汚れを食べ物に運んできます。そうやって様々な病気、特に夏の病気と下痢を伝染させます。

左横のタイトルは「사람살아먹는파리(人を殺す蠅)」

□蠅を殺そう。いますぐに

肺病その他の主要な原因の一つは蠅が汚した食べ物です。

□私のために殺し——

蠅はこの世にいる虫のなかで最も危険なものです。またもつとも汚いも

□公衆のために殺そう！  
のです。汚い所で生まれて汚い所に住み、汚いものを運びまわります。蛆が蠅の前身です。

蠅は数百万の殺人的な微細菌を運びまわり、行く先々に撒き散らします。夏、たくさんの大切な子供たちを苦しめる下痢や疫痢は、すべて蠅が伝染させるのです。

結核は空気感染だが、ここに見るように当時は蠅が運ぶ病原菌が原因の一つだと考えられていた。したがって「宿痾」の原因である蠅は李光洙にとって生涯の仇であった。李光洙は蠅と戦いながらこの生物に関する知識を集積し、ついには文学的な生物へと昇華させ、哲学的な思索の対象とした。そして一九四三年、彼は時代状況に追いつめられた嘆きと怒りを蠅撲滅への執念に込めて「蠅」という傑作を生み出したのである。

### おわりに

一九九二年にソウルで李光洙生誕百年記念行事が行われた翌年、又新社から『그리운 아버지 春園(懐かしい父春園)』という小さな本が出版された。李光洙の次女李廷華氏が一九五五年に文宣社から刊行した本の修正・増補版で、付録として李栄根氏の随筆「이런 일 저런 일 (こんなこと あんなこと)」が収められている。出たばかりのこの本を筆者に贈ってくれたのは、沈元燮氏(獨協大学)だった。これを読んで、戦争末期で食糧事情も悪くなっているころに李光洙が息子と二人で田舎暮らしをしていることを不思議に思ったが、疑問を解く手がかりもなく、それきりになっていた。

二〇一四年一月、筆者は北上市に在住の高橋幹也氏を訪ねた。氏の母親の高橋マサさんが産婆として許英肅産院に出入りをしていた関係で二つの家族が仲良く交際していたことを、東北大学の松谷基和氏と李廷華氏から聞

いて、インタビューに伺ったのである。高橋氏は李栄根氏のことを「光昭さん」と創氏名で呼びながら、光昭さんは勉強がよくできるのに程度の高くない中学校に通っていて、面白くなさそうだったと回想した。そのあと高橋氏の姉が京城の第一高等女学校の入試に失敗した話が出た。ちょうど父親が春川の小学校教員として単身赴任していたので、姉は春川高女に入学し、二年目から京城の学校に転校して家にもどったという。この話を聞いて、ふと李栄根氏の随筆にあった中学校受験失敗の話が思い浮かんだ。「受験に失敗したとき地方の学校を迂回して京城にもどることはよくあったのですか」という筆者の問いに、氏は「よくありました」と答えた。このとき、李栄根氏の転校と「加川校長」の木村の転校が結びついたのである。

本稿を執筆しながら、「加川校長」の背後にあった李光洙の家庭の事情、「蠅」に込められた無念、そして『わが告白』の「民族保存」の叙述が、まるでジグゾーパーズルのように嵌めこまれるのを感じた。そして浮かび上がったのは、群れをなして襲ってくる黒い蠅のような時代の狂気に、蠅叩きならぬ筆一本を手に、前後左右の感覚も失いながら応戦する作家の姿だった。本稿で「蠅」という作品がもつ狂気の正体の一端なりとも解明ができたならば幸いである。

## 註

- (1) 波田野節子、「李光洙の日本語小説と同友会」、『朝鮮学報』第三三輯、二〇、四。
- (2) 分類基準については前記論文の註(15)を参照のこと。
- (3) これについて筆者は、『一九一五年六月に刊行した中公新書『李光洙—韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』の第

四章、第四節「日本語小説を集中的に書いた一年」のなかで簡単に述べた。本稿はその根拠を示すものである。

(4) 林鍾国著・大村益夫訳『親日文学論』、高麗書林、一九七六、二八九、二九一頁。

(5) 金允植、『李光洙의 時代2』巻、一九九九、三三五

六頁。(波田野訳。以下、本稿での韓国語テキストの翻訳は、特に断りがない限り波田野による。)その理由を金允植は、小説というジャンルが観念的な操作をうけつけないものであるという特性に帰している。同上、三五四頁。

(6) 一九九〇年代の韓国では、李光洙が対日協力をしたという先入観のため、『加川校長』の「親日性」は明らかだとする次のような見解も見られた。「春園李光洙が香山光郎という日本名で発表したこの作品は、日本語で発表された彼の小説の中でも典型的である。人が嫌う田舎の学校の校長となったこと、戦略的な破邪顕正の成典(성전)であること、私生活を犠牲にし韓国人を馬鹿にすること。こんな加川校長は作者の化身だと見られる。彼に服従しない李家や神林などの消極的な時局観を正して戦時型に同化させることなど、小説の親日性を露呈した典型的な作品である」。宋敏鎬、『日帝末暗黒期文学研究』、새문사、一九九一、七九頁。ただし李京頃の『李光洙의 親日文学研究』(太學社、一九九八、三一〇頁)の引用文による。

(7) 註(6)の引用文に「加川校長は作者の化身」とある。

(8) 「文化だより」に並んで「朝鮮文人報国会発会式の次第」が掲載されているので、結果的に「文化だより」は李光洙の欠席広告の役割を果たしている。なお、この記事とこのあと引用する記事は、大村益夫／布袋敏博編『朝鮮文

学関係日本語文献目録』(緑蔭書房製作、一九九七)に載っていたおかげで発見できた。

(9) 一九四三年四月一八日付『毎日新報』、「平島文学総力結集—各種団体統合、朝鮮文人報国会結成式盛大」。ただし、この記事に名前が出ている出席者は日本人だけであり、他の朝鮮人作家たちの名前も出ていない。朝鮮文人報国会の会長は学務局長の矢鍋栄三郎、理事長は津田剛で、上部役員はすべて日本人である。朝鮮人側のトップは常務理事に就任した兪鍾午で、李光洙は一理事にすぎない。

(10) 朝鮮文人協会は総督府学務局の意向を受けたと思われる金文輯の根回しで、一九三九年一〇月二十九日に結成され、李光洙が会長、学務局長の塩原時三郎が名誉総裁になった。一カ月半後、李光洙は裁判所から勧告を受けて会長を辞任する。『나의 고백』、『李光洙全集第一三巻』、三中央、一九六二、二六四頁)李光洙は知らなかったようだが、裁判所の勧告の背後には、京畿道警察部長が裁判所に提出した、会員の一部が李光洙の行動は自己保身のためだと非難しているという書状「李光洙等ノ朝鮮文人協会創立二閏年十一月七日」があった。この書状の複写を筆者に提供してくれた郭炯徳氏に、この場を借りて感謝を表す。なお、李光洙が辞任したあと新会長は選出されず、李光洙には

「朝鮮文人協会前会長」の肩書がついてまわった。

(11) たとえば創氏改名をしたとき李光洙はすぐに蘇峰に手紙で報告している。尹弘老『李光洙文學과 詩』、韓國研究院、一九九二、二四六、二四七頁

(12) 李榮根、「이런 일 지런 일」、李廷華『그리운 아버지 春園』、又新社、一九九三、二〇九、二一一頁

(13) 筆者が榮根氏の妹の李廷華氏に直接聞いた話によれば、本人が下痢をしたためだったという。

(14) 許英肅が一九三五年に子どもたちを連れて東京の赤十字病院に研修に行ったためではないかと推測される。李光洙は学齢に達していた李榮根を東京まで迎えに行つてともに帰国し、そのあと同友会事件で逮捕されるまで父子の二人暮らしを続けている。

(15) 『그리운 아버지 春園』、二二〇頁

(16) 同上

(17) 『國民文學』一九四三年一〇月号、一一一、一二二頁

(18) 同上、一九頁

(19) 同上、二〇頁

(20) 解放後に書いた『나의 告白』のなかで李光洙は、対日協力をした理由の一つとして、朝鮮人学生が高等教育機関から締めだされることへの憂慮を挙げ、日本は「大学・専門学校に朝鮮人学生が入学することを従来もさまざま

手段で制限してきた」(『李光洙全集第一三卷』二六九頁)

と書いている。榮根氏が「背水の陣」で受けた中学は、おそらく自宅から歩いて行け、京城でも一番水準が高かった京城中学だったと思われる。李榮根氏の知り合いで一九四一年から四五年までこの中学に在学した高橋幹也かんや氏は、筆者が二〇一四年一月一日に行なったインタビューで、朝鮮人生徒はクラスに一人か二人だったと回想している。担任が「背水の陣」を勧めるほど優秀だった李光洙の子息は、朝鮮人に対する人数制限がなければ合格していたであろう。『나의 告白』での李光洙の憂慮は、受験生の親としての体験に根ざしていたのである。なお、高橋幹也氏は、以前から孝子町に住んでいた産婆、高橋マサの子息である。

許英肅が一九三五年から赤十字病院で研修をしたとき、マサも同病院の産婆養成所で研修を受けていて知り合ったらしい。一九三六年に産院予定地として李光洙が孝子町に土地を購入したときには、マサが関わっていた可能性が高い。一九三八年に許英肅産院がオープンすると、マサは産婆として産院に出入りし、許英肅とのつきあいはやがて家族ぐるみへと発展する。くわしくは、波田野節子「타카하시 칸야 (高橋幹也) 씨와의 인터뷰」(『春園研究學報』第一七号、春園研究学会、二〇一四)を参照。

(21) 庵途由香、「朝鮮における総動員体制の構造」、『アジア太平洋戦争と「大東亜共栄圏」1935-1945』、岩波書店、二〇一一、二四五、二五五頁／林鍾国、『親日文學論』、一〇〇頁

(22) 『國民文學』は月刊で一〇月一日発行。『國民総力』は毎月一日と一五日の二回発行で、「蠅」が載った『國民総力五十一九』は一〇月一日発行である。

(23) 『國民総力』の同じ号に載った津田剛の報告「大東亜文学大会に出席して」によれば、参加者たちは八月二十五日から三日間大会に出席し、九月一日に東京を出て五日に京都で解散したが、津田は東京で用を足してから朝鮮にもどったという。これから推して、報告が書かれたのは九月上旬から半ばだと思われる。蠅もそのころ執筆されたものであるう。

(24) 李光洙、「蠅」、『國民総力』、一九四三年一〇月一日号、三四頁

(25) 一例をあげると、『無情』で善馨に惹かれている亨植が、表面の意識においては英采と結婚することを何度も表明するような、意識の二面性のことである。

(26) 『李光洙全集第一三卷』、二七〇頁。『나의 告白』は一九四八年一月一日に刊行された。序文によれば執筆を終了したのは一月二〇日である。

(27) この名簿のことは『나의 告白』に何度か出てくる。

たとえば「그누는 삼만 내지 삼만 관천이라 하여」(同上、二六八頁)、あるいは「삼만 몇 명이 라는 우리 민족의 크림이라 할 지식 계급」など。(同上、二七〇、二七一頁)。なお「크림」は cream (精選、精髓) の意ではないかと思われる。

(28) 「韓国人が時局に協力しているかどうかを日本人が判断する方法というか、基準のようなものがあつた。それは国民投票のような方法でも、世論調査のような方法でもなかった。それは、彼らの目についた民族主義者が協力するかどうかということだった。ある有名な民族主義者が一人協力する態度を見れば、それを日本官憲は「転向」と称して中央政府への報告材料とし、一般に対してはその意味を実際よりも拡大して宣伝した。崔麟、崔南善、尹致昊がその例だ。こうした人々が生贄になるたびに、総督府は我々を縛っている苦しみの種を一つか二つ緩めるのだった。総督府にとつても、それが大きな自慢となるからだ。崔麟は死して少なくとも天道教を救い、崔南善は死して知識階級の弾圧を一時緩めた。尹致昊の死は直接的には同志会の人々を救い、間接的には民族主義者に対する日本の憎しみを和らげた。こういう者たちも日本に協力するようになったのだから、他の民族主義者にもその可能性がある、様子を見よう、そういう論理である。だが一度燃やした火

もやがては消えてしまう。太平洋戦争末期に近づくにつれて、日本はますます韓国人の動向について焦燥し、そのため三万何名の弾圧対象者の名簿が何かにつけて問題になった」同上、二七〇頁

(29) 同上、二七一頁

(30) 志願が始まることは一〇月半ばから新聞紙上で報道されたが、受付の日程が総督府から発表されたのは一〇月二〇日である。受付は一〇月二十五日から一月二〇日、一月中旬に徴兵検査、一月二〇日入営というあわたたしさだった。姜徳相、『もう一つのわだつみのこえ 朝鮮人学徒出陣』、岩波書店、一九九七、四〇五頁

(31) 日本内地での志願率の低さに驚愕した総督府が「日本留学生勧誘団」を結成させたのは一月七日。李光洙と崔南善は先発隊として翌一月八日に京城を発っている。上掲書、二二七〜二六六頁

(32) 同上、二四五頁

(33) 金祐銓氏インタビュー「あの日学兵勧誘演説をじかに聞いた」、『朝鮮日報』二〇一四年一〇月・九日付記事

(34) 「蠅」が掲載された『国民総力』の同じ号に、津田は「大東亜文学者大会に出席して」という報告を書き、この提案のことを書いている。それによれば、この案は出発前に各方面に根回しをしたうえ大会で発表したもので、毎日

新聞に大きく報道されたという。津田は『緑旗』一〇月号に書いた「大東亜文学者総躍起運動」のなかで、一二月号をこのための特集号すると予告したが、実際には特集は組めなかった。なお「加川校長」が掲載された『国民文学』の同じ号には、第二回大東亜文学者大会に参加した朝・日・中・台の文学者たちによる特集「大東亜文学建設のたぬに」が載っている。

(35) この月、他の雑誌にも、それらしき作品は見当たらない。

(36) 津田の大会報告を見ないまま執筆した拙論「李光洙の日本語小説「大東亜」(『歴史・文化から見る東アジア共同体』、創土社、二〇一五)で筆者は、李光洙が「大東亜」を書いたのは、その前年に創設された大東亜文学賞が動機だったと推論した。しかし、李光洙はこの賞を意識したかもしれないが、「大東亜」執筆の直接的なきっかけは津田剛の提案であつたと思われる。

(37) 『国民総力』一九四三年一〇月一日号、三四〜三七頁。この号は国会図書館デジタルアーカイブで見ることができ

(38) 同上、三四頁

(39) 同上

(40) 同上

(41) 同上、三七頁

(42) 同上

(43) 同上、三五頁

(44) 同上、三七頁

(45) 波田野節子、「大東亜文学者大会での李光洙発言に見る『連続性』」、『韓国近代文学研究—李光洙・洪命憲・金東仁—』、白帝社、二〇一三、五二頁。なお(5)の原文の日本語訳は「個人より団体を、私より公を重視して社会に対する奉仕を生命と思え」である。

(46) この小説を蠅撲滅のキャンペーン小説としてとらえる発想は、註(20)で紹介した高橋幹也氏とのインタビューで得たものである。氏はこう語った。「『京城日報』(わが家で購読していたのはこの『京日』だったが、あるいはほたまに読んでいた『大毎(大阪毎日)』だった可能性もある)で蠅をやっつけようというキャンペーン記事を読んだら、そこに李光洙の名前があった。あの有名な作家も「蠅」という小説で蠅の撲滅を訴えていると書いてあったので、香山先生は新聞に載るような有名な作家なのだと思っただけだった。」(『春園研究学報』第一七号、春園研究学会、二〇一四、三七六頁)当時「蠅」がどういふ小説として受け取られたかを示す重要な証言であるが、該当する記事は残念ながらまだ見つけられずにいる。

李光洙の日本語小説「加川校長」と「蠅」について(波田野節子)

(47) 『国民総力』一九四三年一〇月一日号、三六頁

(48) 同上、三六〜三七頁

(49) 同上、三四頁。「私の白髪頭や、顔の皺や、骨と皮とばかりの貧弱な體格を見ているのであらう」

(50) 同上、三六頁

(51) 一九三八年五月二二日未明、岡山県の現津山市の村落で、都井睦夫という青年が二時間のあいだに同じ村に住む三〇人を惨殺した事件。遺書によれば、殺人の動機は結核にかかって受けた村人の差別にたいする怨みだった。犯行時、犯人は詰襟の学生服に軍用ゲートルをまいて地下足袋を履き、頭に鉢巻を締めて懐中電灯を二本さし、首には自転車用のランプをぶら提げていたという。

(52) 訳文は『李光洙短篇集 嘉実』、モダン日本社、一九四〇、一九一〜一九二頁

(53) 同上、一九三頁

(54) 波田野節子、「大東亜文学者大会での李光洙発言に見る『連続性』」、『韓国近代文学研究—李光洙・洪命憲・金東仁—』、白帝社、二〇一三、五〇頁

(55) 김경미, 「李光洙後半期文学의 民族言說의 兩面性」、『語文学』第九七輯、二〇〇七、二〇〇〜二〇二頁。参考にされている書籍は、호미마저, 나병철 역 『문화의 위 치』, 소명, 二〇〇二。(邦訳 ホミ・K・バーバ著、本橋

哲也ほか訳『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』、法政大学出版局、二〇一二)

(56) 李承信、「李光洙의 二重語文學考察」、『帝國日本の移動과 東아시아 植民地文學』、문, 二〇一一、二九五頁

(57) 李光洙が『無情』の五二節で、遣り手婆が英采の清らかな靈魂に接したあとで「令監ジンイ」を見てその魂の汚れに気づいたことを、「ちようど汚い家で成長したために自分の家の汚さに気づかなかった人が、一度清潔な家を見たあとには自分の家が汚いことに気づくように」と書いているのは、東京から帰ったあと朝鮮の衛生觀念の欠如に気づいた自分の経験と關係があるように思われる。

(58) 『나의 告白』『李光洙全集第一三卷』、一九五頁。以下は原文。 나는 이 동포들을 다 이렇지 아니하도록, 그리고 모두 깨끗하고 짐작게 되도록 가르치는 것이 내 책임이라 고 생각하였다.

(59) 『學之光』八号、一九一六年一月発行

(60) 一九一六年二月二六日〜一九一七年二月八日『京城日報』連載

(61) 一九三二年〜四月二二日〜一九三三年七月二〇日『東亜日報』連載

(62) 一九三六年に『朝光』四月号に發表した『多難한 半生의 途程』で李光洙は、明治学院の學校誌『白金學報』

に載った短編「愛か」が『富の日本』に転載されたと回想しているが(『李光洙全集第一四卷』、三九二頁)、これは記憶違いで、正確には『中学世界』である。李光洙は『中学世界』という雑誌で企画した「都下優等生訪問記」の担当記者からインタビューを受け、その記事が写真付きでこの年二月号に掲載された。その末尾に「愛か」の一部が転載されている。この雑誌も『富の日本』と一緒に持ち帰って大切にしていたために記憶が混同したのである。

(63) 「蠅を憎む記」は岩波書店が一九四〇年に刊行した『鏡花全集』巻六のほか、『日本幻想文學集成(一)』、国書刊行会、一九九三にも収録されている。

(64) 『千眼記』は『東亜日報』に一九二六年一月五日から連載されたが、『東亜日報』が停刊になったため三月六日で中断した。一九三五年四月から『朝鮮文壇』で八回にわたり再連載されている。『李光洙全集第三卷』、三七五頁。以下は原文。 늬이 그렇게 크지는 못하나 빛이 가무스레하고 목이 대바로 볼고 공무니가 심히 뽀조하고 꼭 다부지고 싱겁하게 생겼다. 傍線の箇所の意味が不明である。初出では「목이 대바투붓고」なので、「首が体に近くついている様子」だと解釈して、このように訳した。

(65) 『富の日本』第一卷第二号、一九二〇、六〇頁

(66) 『三千里』一九三二年四月号、九八頁／『李光洙全集

第一四卷』、二〇八頁。以下は原文。 내 머리는 차꾸만 물속으로 들어갔다. 「엄마」하고 부르려 하였으나, 소리는 아니하고, 부귀에서는 옹옹옹옹하는 소리가 나고, 눈 앞에는 붉은 것, 푸른 것, 누런 것, 긴 것, 둥근 것, 이상 아릿한 것들이 보였다. 傍線を引いた部分の最初の文字は「옹」であるが誤植であろう。初出では「옹々々々々々」になっている。

(67) 『富の日本』第一卷第二号、一九二〇、五八頁

(68) 波田野節子訳『無情』平凡社、二〇〇五、九五頁

(69) 同上、一七三頁。『無情』では、このほかに三六節、四四節、一〇〇節に蠅が登場している。

(70) 『東光』第二号、一九二六、六一頁

(71) ただし李光洙が執筆者であるという確証はない。この前年、京城医学専門學校に復学し、『東光』創刊号から手記を連載していた劉相奎が執筆した可能性もある。だがその場合でも、健康欄の蠅撲滅への熱意は李光洙との共有物だったはずである。 유웅섭・유승민・유영삼 『도산 안창호의 기행』 간 의과 의사 태호 유상규(鳥山安昌浩の道を歩んだ外科医師太虚劉相奎)』, 더 북스, 二〇一一、九四一〜二〇頁

(72) 同上、六三頁。四つの項目は以下のとおり。 1. 家に蠅を入れない。 2. 食べ物に蠅を触れさせない。 3. 蠅が触れた物は食べない。 4. 蠅のいるところで物を食べない

(73) 同上

〔謝辞〕 本稿は日本學術振興会より科研費助成をうけた基盤研究(B) 25284072の成果の一環である。

本稿は、二〇一五年一〇月四日(日)に天理大学で開催された第六六回朝鮮学会で行なった同タイトルの発表の内容に加筆・修正したものである。

(新潟県立大学名誉教授)